そうだったのか!! 間違いだらけのハムスター飼育

耳を立てひげを張りながらこちらを見つめるハムスターの愛らしいつぶらな瞳。でも、それは不安と緊張で張りつめた恐怖の表情だった。

写真・文　編集部

ハムスター発見

ことしの干支は子。干支の一番になるほどヒトとのかかわりが深いネズミが、ペットとして一般に普及したのは二十日鼠を除けば世界的に60年代半ば頃からの事で、まだ50余年の歴史しかない。

実験動物だったゴールデンハムスターのペット化を皮切りに、現在は小型のジャンガリアンを中心に多分20種類以上のハムスターが販売されている。

世界中で飼育されているゴールデンハムスターのルーツは、あるオス1匹と2匹メスだという。3匹は1930年にヘブライ大学のアハイロニ教授がシリアで捕獲した12匹か11匹のファミリーの生き残りで、彼らが繁殖して世界中に広まった、というのだから驚き。

ゴールデンがシリアで捕獲される2年前、アメリカではミッキーマウスがデビューした。いまでは世界最強キャラのミッキーと世界的普及を果たしたハムスターの同時デビューはただの偶然だが、ミッキーのモデルはウォルト・ディズニーが飼っていたネズミ（二十日鼠らしい）というからミッキーもペットネズミの1種だと言えなくもない。

ハムスターはか弱い?

ネットでハムスターの飼い方を検索すると、市販のゲージ（プラスチックのパイプがついていたりするあれ）を買う、水飲み器とトイレと回し車をつける、が話の前半で、後半には病気についての警鐘が大体長く続く。ヒトにある病気はほぼあって、水溶の下痢になるとすぐ死んでしまうとか、はかない記述も多い。

「ハムスターは、か弱くて、すぐ病気になり臆病だとよく言われますが、そんなことはありません。好奇心が旺盛で元気で活発です」と語るのはハムスター飼育の達人、入澤二郎さん。

入澤さんがハムスターを健康に育てるために開設したサイトには、ハムスター飼育に思い悩む人々からの問い合わせが絶えない。いまでこそ達人の入澤さんだが、初めて飼ったジャンガリアンのココちゃん―昔、小学生だった娘さんがもらってきたココちゃんは1年足らずで死んでしまった。飼育書どおりに育てていたが、口の周りがただれはじめ動物病院でも治せず亡くなったという。

ココちゃんの死がきっかけで入澤さんはこれまでの飼育法に疑問を持つようになった。

詳しい解説は入澤二郎さんのHPをご覧ください！
http://www.ham-ham-ham.com/profeel.html

健康飼育探求の旅

野生のハムスターはトイレ、寝室、餌の貯蔵庫（入澤さんは「巣穴の3大習性」と呼ぶ）など複数の地下室を使い分けて暮らしている。巣穴から外に出るのは餌探しと恋愛のためだけで、生活の大半は巣穴の中だ。

ハムスターに消化器系の病気が多く病弱なのは、住環境からくるストレスのせいではないかと入澤さんは考えるようになり、2代目モコちゃんの部屋放し飼いに挑戦。

モコちゃんは家のあちこちに食べ物を貯蔵し多様な生活を始めた。食べ物を消化する時間が非常に短いハムスターは頻繁に食べなければならずそのためにたくさん食べ物を貯蔵するのだそう。

上から見た『地下型の巣箱』▲
『地下室の巣箱』内部▼

自由な暮らしが続くと自ら寄ってくるようになり、やがてどこにいても呼べばやってくるようになった。

「ストレスがなくなると好奇心が顕在化します」と入澤さん。「表情も変わってきます。まず耳が垂れてきます。耳やヒゲがピンと張っているのは緊張しているからでリラックスすると耳もヒゲも緩み、緊張で出目金のように飛び出ていた目が元にもどります。ストレスがなくなれば飼い主と良好な関係が築けます」。

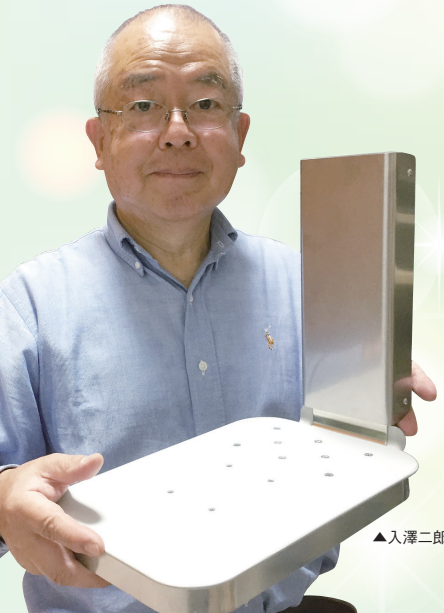
信頼されれば噛んだりしなくなる。

ハムスターは餌探しに一晩5キロも走ると文献にあったので回し車にカウンターを設置し計測したところ本当だった、とか地道な検証も重ね、たどり着いたのが『地下型の巣箱』だ。

『地下型の巣箱』

『地下型の巣箱』は2階建て。上の衣装ケースはハムスターの運動する場所で、回し車や水飲み場がある。地下室へは小さな穴で出入りする。地下室は人目につかずハムちゃんがリラックスできるスペースで、「巣穴の3大習性」が繰り広げられるところ。

ハムスターをはじめて家に



▲入澤二郎さん

冷暖房器開発に協力してくれたワンちゃん。A4版サイズが～中型犬対応までサイズは4種類

猛暑のなか、クーラーでネコもウサギも眠る

お迎えするとき、迎える側は大歓迎でもお迎えされるハムちゃんは不安でいっぱい。

「食べられてしまう！」という恐怖でパニック状態かもしれません」と入澤さん。「そんな状態で体の大きなヒトと出会ったら脅威と学習してしまうでしょう」。

いったんヒトを怖いと学習してしまうと、その後の付き合いが難しくなる。

納得するまで辛抱

家に来たばかりのハムスターは袋や箱から取り出さず、口をあけて『地下型の巣箱』の地下に通じる穴の近くに置いておく。

ハムスターごとに時間はまちまちだが自から地下室に入るのを待ち、家も食べ物も安全もあるとハムスターが認識して自分から1階に出てくるまで根気よく待つのが大切だという。

あらかじめ1階に食料や水、巣の資材、地下室にはトイレ用の砂を入れておけば、ハムスターは夜中に食料や巣材を地下に運び、6つの部屋を使い分けてお気に入りの巣を作りあげる。やがて食料も安全もある住居だと納得し、満を持して登場する日が来るのだが、安心するまで何日かかるのかはハムスター次第。

何日も出てこないからといって地下室を暴いたりしては絶対にダメ。ハムスターからすれば、とつぜん家の屋根がなくなり大きな動物にのぞかれるのだから驚愕絶叫の事態、この場所は危険だと学習してしまう。

そうなればハムスターの警戒心は高まり、のぞいたヒトとお友達になろう！など言う気持ちになれるはずがない。

まだある飼育グッズ

入澤さんは動物用の冷暖房器具も開発した。世界的な超有名電機メーカーのエンジニアだった入澤さんならではの製品で、モーターやファンを使わないペルチェ素子による冷暖房だ。

「ハムスターも犬も猫もウサギも、ヒトより可聴域がひろいので、モーターやファンの音がすると落ち着かないのです。振動もよくない」。サイズは動物の大きさに応じて4種類用意している。好評だと言う。

最近、動物用冷暖房のニッチに気づいた大手家電メーカーが類似品の販売を始めた。

入澤さんのサイトBBSは入澤さんの指導で、ついにハムスターの心を掴んだ相談者からの熱い報告がたくさん寄せられている。問答を読みこむと「ハムスターの考え」が少しずつわかってくる。

投稿の真剣さにも驚くが、回答する入澤さんの熱意も尋常ではなく、これはすでに社会運動だ、という気がする。

『地下型の巣箱』も無音の冷暖房も入澤さんが観察眼と腕のある技術者だったから完成できたのは間違いないが、それだけではいまに続く継続性は生まれてこない。根底に生き物への深いいつくしみを感じる。